

# 本校の SSH 事業の取組が 時事通信社発行 全国版教育誌 『内外教育』に掲載されました！

昨年度3月に本校の学校設定科目「OMURA STEAM LABO」を題材とした東京学芸大学主催「東京学芸大学高校探究プロジェクト 教科横断プログラム開発ワークショップ」での発表について、時事通信社発行の全国版教育誌『内外教育』2024年4月16日号に掲載されました！

2ページにわたる特集となっており、見出しは「公共の扉」で「哲学入門」です。

昨年度のベネッセ「VIEW next 6月号」、東京学芸大学「東京学芸大学高校探究プロジェクト 教科横断プログラムワークショップ」に続き、全国で本校の取組が紹介されました。

今後も「最先端の学びを日本の西端から創造」できるように、全職員、全生徒で SSH 事業を推進していきたいと思えます。

掲載された記事の内容は、次ページに載せております。



※時事通信社の記事につきましては、無断で転載することを固く禁じます。

# 「公共の扉」で「哲学入門」

## ●高校探究プロジェクトのワークショップ—東京学芸大



高校教員に向けて授業モデルを提示するなど教師教育の支援に取り組む東京学芸大学高校探究プロジェクトは3月18日、「総合的な探究の時間」や各教科で取り組む探究学習の教材開発をテーマに、オンラインでワークショップを開いた。新年度の教職デビューを控えた学生を含め約70人が参加。プロジェクト連携校、長崎県立大村高校(長崎県大村市)が学校設定科目として教科横断で取り組んだ授業研究の成果報告などがあり、同校が新教育課程の新科目「公共」の内容「公共の扉」に即して行った「哲学入門」の授業例に参加者の関心が集まった。

### プレ・ワークショップとして実施

ワークショップ冒頭、プロジェクトの代表である西村圭一同大教授が趣旨説明を行った。それによると、プロジェクトの新年度企画として、各高校内で探究学習を推進する契機となるような「ミニ探究教材」を開発するワークショップを計画。この日のプログラムは、その「プレ企画」「プレワークショップ」の位置付けだという。

西村教授は問題意識として次のように述べた。

- 1 データの分析・統計の基礎知識の修得(数学科、4〜6月6こま)
- 2 データ処理スキルと仮説検定の実施(外部講師、6〜9月4こま)
- 3 クリテikalシンキングを發揮した統計的資料の分析(外部講師、9月2こま)
- 4 英語ボスターの作製方法・海外の科学に関するトピックス入門(英語科、8月2こま)
- 5 判断する力を養成するための哲学入門(地歴・公民科、10〜11月6こま) Ⅱ東京学芸大学 高校探究プロジェクトとの連携「公共」での公開授業
- 6 STEAM開発教材「エネルギー問題」(外部講師・探究SSH企画部職員、12〜2月7こま)

川久保教諭は、特に5で「哲学入門」を入れた理由についてこう述べた。

「判断する力を身に付けるためには、自分自身はどういう考え方をする人間なのか、自分自身を知るといふか、そういうものがないと、ちゃんと判断ができないだろうし、哲学を身に付けると自分自身のこと、そして周囲の人のこともきちんと考えるようになっていけるのではないかという思

各学校内の実態を見ると総合的な探究の時間(総探)、また、各教科において進める探究的な学びともに、その推進体制にどこか不全感が目立つ。教員がそれぞれ「担当任せ」で「人ごと」のような感じが見て取れる一方で、「総探の担当者の負担が過重」であったり、熱心な総探担当者が異動すると、途端に校内体制が立ち行かなくなるといった問題が起きがちだという。

そこで「一人一人の教師の相互還流」が必要だとして、具体的に探究学習の「ミニ教材」づくりを校内共同で行い、各教科の「見方・考え方」を持ち寄って1年生を対象に授業を行うことを想定。こうしたことを通じて「校内の目線合わせ」をしっかり行うことにつなげたい——というのが、取り組みの狙いだとした。

西村教授の発言後、ワークショップの参加者は九つのルームに分かれ、自己紹介と「実現可能性は脇に置いて」開発・実践してみたい教科横断のプログラムなどについて話し合った。

筆者がお邪魔したルームでは、千葉県の私立高校教員が「附属の中学校では探究学習を熱心に取り組んでいるのだが、高校に上がると(旧来的

### 「哲学入門」を採り入れた公共授業

その後再びルームに分かれ、話し合った。筆者のルームでは、今後、教科横断的に取り組むべきプログラムのテーマとして、AI(人工知能)、能登半島地震を受けての災害対策といった話題が出た。

また、教科の学びと総探のそれぞれにおいて、ある程度の探究プログラムは出回っているという指摘が聞かれた。だが、プログラムは個別・散発的に出ているだけだという。また、教員が連携して科目横断で授業や単元をつなこうと検討する場面は、実際にはなかなかないという。

全大会に戻り、進行役の東京学芸大の藤村祐子准教授が、各ルームの討議内容をまとめながら「OSLは教科横断ありきで決まったのか、それとも何かのために教科横断になるという道筋だったのか」と川久保教諭にたどした。川久保教諭は「判断する力(目指す生徒像)」というのが最初にあつて、そのためには自分の考え方がどうあるのか(哲学入門)が来た」と答えた。

な)教科指導にとどまっている」と述べ、そのちぐはぐさ、違和感が国語科教員として自身の問題意識になっていると語った。

全体会に入り、大村高校の教員が登壇し実践報告を行った。1人目の川久保晃一教諭はカリキュラム開発の企画担当者。教科は数学を担当する。「学校設定科目『OMURA STEAM LABO』の概要について」と題して話した。

大村高校は文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けて、現在2期目に入り、通算6年目になる。これまで「サイエンス基礎」という理系の学校設定科目を持つていたが、新たに文系の学校設定科目を設けることにした。その新科目がOMURA STEAM LABO(以下、OSL)で、主にSTEAM教育(科学、技術、工学、芸術、数学の枠を超えて各教科等の学びを実社会での問題発見・解決に生かしていく教育)の考え方を取り入れていくという。

2023年度に新設した文理探究科の1年生2クラスを対象に初めて実施している。

川久保教諭が参照したのは米英の事例や、フランスでは高校3年で哲学を必修科目にしているといったことだった。「本校でもそうしたリベラルアーツを取り入れたいと考えた」と学校設定科目を開発する動機を述べた。

同教諭はこの他▽例えば、人工心臓を移植する医療現場では医学、工学のほか法律整備が必要だった▽人工衛星の太陽電池パネルに、日本の伝統技術である折り紙の「ミウラ折り」の折り畳み技術

ユラムも特別だ。昨年11月2日に単元4、5時間が授業研究会として公開になった。テーマは「自己と他者の生き方」公共の場をどうつくる」で具体的に生徒たちが「公園の廃止」を巡る議論をした。

本単元で特に育成したい力として小林教諭は「自律した主体」として、合意形成や社会に関わろうとする姿勢を基に、他者と議論する力(さまざまな視点から論理的に物事を捉えた上で、選択・判断する力)の二つを挙げた。

授業には生徒が個別に対話をする様子が多くあると同教諭は紹介。授業の前後に生徒にアンケートをとっている。この日は、その抜粋をスライドで示した。

小林教諭は、授業実践の課題としてこう述べた。「統計やデータといった、根拠に基づいた学習をした後で、統計やデータでは測れないようなグレーゾーンがある(ことに気付くだろう)。「私」自身はどのようにこれに向き合っていくか、そこをどう表現していくのかを学んでいくことに哲学入門の意義があるのではないか」

また、小林教諭は「学校設定科目は学校設定科目」「教科は教科」という思考からの脱却が必要だとした。その上で、学校設定科目で学んだことと教科で学んだことがリンクする仕掛けが必要だと述べた。また、学習評価の面では、単元間の評価観を擦り合わせる必要性が出てくる。そのあたりは今後の課題、とした。

(矢内 忠 Ⅱ教育ジャーナリスト)